特集

アート、起業、ボランティア、文化で元気なまちに

活動系大学生の実践まちづくり

「春」は新しい出会いの季節。将来の希望を胸に、全国各地からたくさんの大学生たちが佐世保のまちにやって来ます。そうした中、市内には、「佐世保のまちを盛り上げたい、元気にしたい」と強い思いを抱き、さまざまな分野で活動している学生の皆さんがいます。

今回の特集では、学生ならではの感性やアイデアを生かし、「アート」「起業」「ボランティア」「文化」の各分野で活動している様子や佐世保への思いなどを紹介します。皆さんも一緒にまちづくりに参加して、佐世保を盛り上げてみませんか。

※取材時は新型コロナウイルス感染症対策を徹底した上で、写真撮影の時だけマスクを外しています。

造船や時計をテーマとしたアートを描く様子

シャッターにアートを描く学生さん

シャッターに下描きする様子

学生×アート

シャッターアートで商店街を明るくしたい

シャッターアート
運営チーム リーダー
長崎県立大学１年
高木　麻由さん

夜でも歩いて楽しい商店街をつくりたい

「若者の流出が進む中、佐世保のまちを元気にしたい」と思い、昨年４月から大学の仲間たちと商店街にある店舗のシャッターにアートを描く活動を始めました。

「佐世保のために何かできることがないか」と、高校時代の友人で副リーダーの八尋（やひろ）さんと大学の補助金などを活用した活動を検討してきました。

日中にぎやかな商店街も夜はシャッターが下り、歩いていると何だか寂しい印象を受けました。そこで、「夜でも歩いて楽しい商店街にできないか」と他のメンバーと話し合い、30件以上のアイデアの中からシャッターアートに取り組むことを決めました。

商店街５カ所のシャッターに描くのは、展海峰や石岳展望台からの眺めなど、佐世保をモチーフとしたアート。ＳＮＳなどで発信していくことで、さまざまな地域の方に佐世保の魅力を伝え、訪れてもらえるきっかけになればと考えました。

また、メンバーの中には市外や県外出身者も多く、今回の活動が楽しい思い出となり、佐世保を第２の故郷と感じてもらえるようになればと思っています。

活動を通じて感じた佐世保の人の温もり

昨年８月からアートを描き始めましたが、描く前にはシャッターの清掃や下塗りが必要です。その作業にはメンバー以外の学生や、作業中にたまたま通りかかった人たちが協力してくださいました。また、活動中にはいろんな方から声を掛けていただいたり、時には差し入れをいただいたりすることもあり、改めて佐世保の人の温もりを感じました。

今回の活動には総勢約30人の学生が携わっており、デザイン制作やボランティア、シャッターアートを描かせていただいたお店など、多くの皆さんの協力があったからこそ完成できたと思っています。

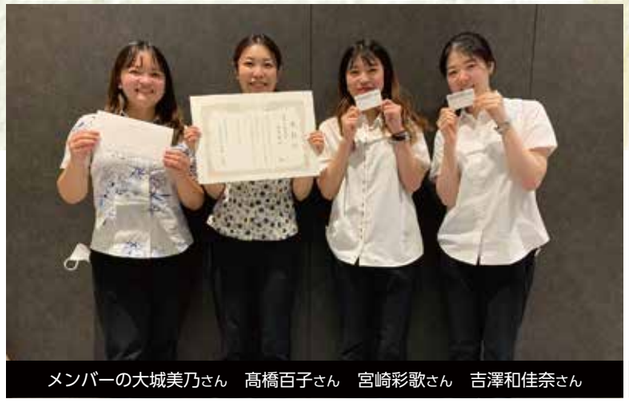
現在も「私のお店にもシャッターアートを描いてほしい」というお話をいただいています。来年もこの活動と発信を続け、他の方法でも佐世保を元気にできないか、引き続き考えていきたいです。

（取材日　1月21日）

シャッターアート運営チームのインスタグラムはこちら

長崎学生ビジネスプランコンテスト 2020 長崎自動車賞受賞

縫製工場見学


メンバーの大城美乃さん　髙橋百子さん　宮崎彩歌さん　吉澤和佳奈さん

学生×起業

起業で地方縫製業を活性化したい

長崎 YOKA シャツ
プロジェクト
長崎県立大学４年
髙橋　百子さん

ファッションで視覚的にアピールを

元々起業に興味があり、大学で学んだことを社会で実践したいと考え、昨年7月、長崎をテーマにデザインしたシャツの企画・販売を行う「長崎ＹＯＫＡシャツプロジェクト」を立ち上げました。

きっかけはおととしの11月、大学の先生の紹介で縫製会社を訪れた時のことです。そこで海外委託生産や少子化による学生服需要の減少など、地方の縫製業が厳しい状況にあることを聞き、「自分たちで何かできないか」との思いから、今回の取り組みを始めました。

私たちが企画したＹＯＫＡシャツは、沖縄のかりゆしウエアを参考にして、佐世保の市街地や佐世保バーガー、九十九島など、佐世保のＰＲにつながる題材をデザインに採用しています。

さまざまな企業に商品説明を行ったところ、「佐世保のＰＲになりそう」「職場が華やかになりそう」など前向きな意見を多くいただきました。これから、より多くの人にＹＯＫＡシャツを着ていただくことで、ファッションで視覚的に名物や名所をアピールして、佐世保を盛り上げていきたいです。

やりたいことを実現できるまち

今回の取り組みを通して、佐世保は「人のつながりが強いまち」だと感じました。プロジェクトの実現に向けて地元企業のつながりから支援の輪が広がり、数社集まって話し合う場を設けていただきました。複数の企業からプロジェクトへの賛同をいただき、目標に向かって協力してくださる佐世保の皆さんの姿勢に感銘を受けました。

佐世保は、やる気があればやりたいことを実現できる環境が整っているまちだと思います。相談すると親身になって応えてくれるほど企業との距離が近いことに加え、佐世保に住む人の多様性の高さや寛容さが可能にしているのだと思います。

縫製業を取り巻く環境の変化は、佐世保だけの問題ではありません。今回のプロジェクトを成功させて、佐世保から全国を元気にしていきたいと思っています。

（取材日　1月14日）

長崎ＹＯＫＡシャツプロジェクトのインスタグラムはこちら

出張まちの学食の様子

出張まちの学食の運営スタッフ

茶植えボランティア

茶植えボランティア

学生×ボランティア

ボランティア活動で地域に還元したい

まちの学食
学生運営チーム
長崎県立大学３年
鍬崎（くわさき）　朱音（あかね）さん

感謝の気持ちをボランティアで

「まちの学食」とは、新型コロナウイルス感染症の影響を強く受けた学生に無償で食事を提供する学生応援プロジェクトのことで、佐世保の企業や地域の皆さんからいただいた寄付を基に活動しています。

私たちはまちの学食の学生運営チームとして、おととし6月から学生へのボランティア活動のあっせんやイベントの企画・運営を行っています。

実際に私たちも食事を支援していただき、「感謝の気持ちを伝えたい」「何かお返ししがしたい」という気持ちが芽生え、ボランティア活動を始めました。

これまでに、人手が足りない茶農家での茶植えや子ども食堂での食事提供などを行ってきました。地元企業や地域の皆さん、他の大学生などと接する機会が生まれ、いろんなことを学べるので、とても良い経験になっています。また、ボランティア活動は自分たちの活動が社会に貢献していると実感できるところが、とても魅力的だと感じています。

学生が個々で活躍できるまち

佐世保は学生の活動が盛んで、起業やカフェの運営など、一人一人がやりたいことを受け入れてくれる、学生が活躍できるまちだと思います。大学で学んだことを生かしながら、自分のスキルや能力を実践できるところに、すごくやりがいを感じています。

また、いろんな人の支えがあって今の活動ができている、もっと地域に還元したいという気持ちが今のモチベーションにもつながっています。

これからも困っている学生が気兼ねなく「まちの学食」を利用できるようにしたいです。そのためにも、皆さんにもっと私たちの活動を支援していただけるように、活動の幅を広げ、イベントなどを開催し、感謝の気持ちを地域に還元していきたいと思います。

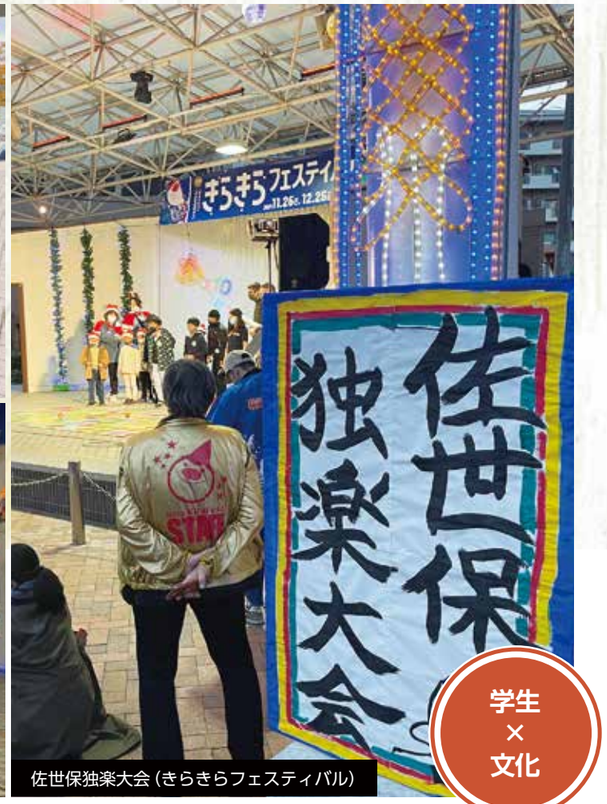
（取材日　1月12日）

まちの学食 学生運営チームのＬＩＮＥはこちら

まちの学食 学生運営チームのインスタグラムはこちら

佐世保独楽大会のメンバー

佐世保独楽大会の様子



佐世保独楽大会（きらきらフェスティバル）

学生×文化

佐世保独楽で文化を伝えたい

佐世保文化研究会
長崎国際大学３年
田口　樹菜（じゅな）さん

佐世保文化研究会
長崎国際大学３年
仲宗根　雅さん

興味関心を持って次の世代に伝えたい

私たちは、大学のゼミの一環で佐世保をテーマとしたテレビ番組の撮影やラジオの収録を行っています。

ある時、若い世代の中に「佐世保独楽（こま）」を回せない人がいることを知りました。これから文化を継承していく若い人たちが、自分たちのまちの文化や歴史を伝えられないことに驚き、「次の世代にどうやって文化を広めるか、伝えられるか」ということを考えるようになりました。そうしたきっかけで、「佐世保独楽」を使ったイベントを開催できないかと考えていたところ、昨年12月に行われた「きらきらフェスティバル」で「佐世保独楽大会」の企画運営を任されることになりました。

当初はこれから親となる世代をターゲットにしていましたが、当日の会場には年齢や国籍に関係なく約３００人もの人が集まりました。コロナ禍で無事に開催できるか不安もありましたが、こまの回し方を思い出し笑顔を浮かべる親子や外国人など、参加した人たちのこま回しを楽しむ姿をうかがうことができ、イベントを開催して本当に良かったです。

活動を通じて佐世保が大好きに

市外出身の私たちにとって、佐世保をテーマとするテレビ番組の制作は分からないことの連続でした。初めて聞く事も多く、佐世保の文化について周りの友人や先生から話を聞いたり調べたりするうちに、学ぶことが楽しくなり、佐世保が大好きになりました。

私たちが実感したように、若い世代の人たちにも楽しみながら文化を継承してほしい。そのためにも、まずは「佐世保独楽」の大会をいろんな場所で開催していきたいと考えています。

また、佐世保はさまざまな国籍の人がいて国際色豊かな面白いまちなので、幅広い世代、国籍の人たちが佐世保の文化を楽しめるようにしていきたいです。

（取材日　1月19日）

佐世保文化研究会の応援アカウントはこちら

特集に関する問い合わせ　商工労働課　☎24・1111
（詳しくは各団体にご連絡ください）

市民の皆さんの声を市政に反映しています

市役所には日々、市民の皆さんからさまざまな声が届いています。本市では、皆さんからの声を市政の推進や行政サービスに反映するため、市民の声を広く聴く「広聴」に取り組んでいます。今回は実際に「市長への手紙」や「ご意見箱」などで受け付けた声を市政に反映した事例を紹介します。

事例1　公園の遊具を改善してほしい

佐世保公園「きららパーク」にある滑り台のアーチ部分に子どもが頭をぶつける姿をよく見掛けるため、クッションガードを取り付けてほしいです。

本市の対応

滑り台は「滑降姿勢に移る部分には、着座姿勢に導くためのガイドバーなどを設置しなければならない」と基準で定められています。ご指摘の滑り台は中央のガイドバーが両端より下がっているため、頭をぶつける恐れがあることから、遊具メーカーと相談し、ガイドバー端部に保護カバー（写真の黄色部分）を設置しました。

事例2　特産品展示ケースの見直しを

市役所２階の連絡通路入口に観光特産品の展示ケースがありますが、古い資料や変色した産品などが気になります。

本市の対応

ご指摘のとおり、特産品展示ケースは長い間更新がされておらず、本市の特産品の良さを十分に伝えきれていない状況でした。そのため、展示する特産品の見直し協議を行い、三川内陶磁器工業協同組合の皆さんの協力の下、新しい展示品として「三川内焼」をテーマとしたケースへのリニューアルを行いました。

事例3　公園のスズメバチの巣を駆除してほしい

市内にある公園の屋根付き休憩所の天井にスズメバチの巣を発見したので駆除をお願いします。

本市の対応

現地確認の上、専門業者に依頼しスズメバチの巣を駆除しました。なお、ハチの巣の駆除は巣が発生した場所の所有者・管理者が対応することになっています。

【私有地の場合】

所有者・管理者が専門業者などに依頼して駆除してください。

【公共施設（公道、公園、学校など）の場合】

ハチの巣がある公共施設の管理者にお尋ねください。

※スズメバチの他、犬や猫、イノシシなどのことでお困りの場合の各種問い合わせ先を「佐世保市公式LINEアカウント」のチャットボット機能で調べられるようにしていますので、ご利用ください。

「佐世保市LINE公式アカウント」の登録はこちらから

過去の反映事例はこちら

皆さまからの市政に対するご意見・ご要望を市政に反映させ、より良いまちづくりを進めるため、建設的なご意見をお待ちしています。

問い合わせ　秘書課　☎24-1111